

レジオナリズム  
**在台日本人の郷土主義**  
 —島田謹二と西川満の目指したもの—

橋本 恭子

はじめに

第1節 モデルとしてのプロヴァンス文芸復興運動

第2節 吉江喬松という媒介

第3節 在台日本人の「郷土主義」

第4節 南方文化の建設へ

むすびにかえて

(要約)

詩人西川満と比較文学者島田謹二は、1930年代末、台湾独自の「地方主義文学」(郷土主義)<sup>レジオナリズム</sup>を育成しようと尽力し、1939年末には台湾文芸家協会が結成され、翌年1月には『文芸台湾』が創刊される。もともと1930年代というのは、日本内地と台湾とを問わず「郷土」に関心が集まった時代であり、内地では農本主義や日本浪漫派のような日本主義的郷土主義が台頭し、台湾では郷土文学論争や台湾話文運動が展開されていた。在台日本人の間にも郷土意識や台湾意識が芽生え、島田や西川も南仏プロヴァンスの言語と文学の復興運動をモデルに、中央文壇から自立した文芸のあり方を模索する。おりからの南進ブームにも乗り、二人は南方文化政策の一環としての「郷土主義」<sup>レジオナリズム</sup>を目指す。それは内地の日本主義的郷土主義とは一線を画した、「反中央的な在台邦人ナショナリズム」の現れでもあった。

はじめに

詩人で台湾日日新報文芸部長の西川満(1908-1999)は1930年代後半、全島的な文壇を建設し、台湾独自の「地方主義文学」(郷土主義)<sup>レジオナリズム</sup>を育成しようと奔走していた。台北帝国大学講師で比較文学者の島田謹二(1901-1993)も理論方面からそれをバックアップし、彼らの思いは1939年末の台湾文芸家協会の結成、および翌年1月の『文芸台湾』の創刊に結実する。

この時期、島田と西川は19世紀中葉以降、南仏プロヴァンス地方で活発に展開されていた言語と文学の復興運動をモデルとし、西川が運動の領袖であったノーベル賞詩人フレデリック・ミストラル(Frédéric Mistral, 1830-1914)を目指していたことはよく知られている。二人がプロヴァンス文学をモデルにしたのは、西川の恩師であり、大正末期、日本にそれを紹介した吉江喬松(号、孤雁、1879-1940)の影響が大きい<sup>1</sup>。また、南方植民地という台湾の地理的特殊性や日本帝国の南方進出という時代状況も大きく関わっていた。

しかしこの時期、「郷土」に関心を寄せたのはなにも西川や島田だけではない。実は1930年代というのは日本内地と台湾とを問わず、「郷土」に関心が集まった時代だったのである。まず内地では、昭和初年、世界恐慌の影響で農村が破局的な危機に陥るや、児童に愛郷心や愛国心を涵養し、郷土救済を図ろうとする郷土教育運動が文部省の肝いりで全国的に展開され<sup>2</sup>、その勢いは台湾にまで及んでいた。また、農村の救済と尊皇愛国が結びついた農本主義の思想も台頭し、社会主義思想の弾圧によって転向を余儀なくされた知識人が「ふるさと」(土の世界・農の世界)に回帰するという現象も起こる<sup>3</sup>。1935年には明治維新以来の外来の近代思想を批判し、郷土日本へ

の回帰を標榜する日本浪漫派も現れた。こうした現象はいずれも、1930年代における日本の「郷土主義」といいだろう<sup>4</sup>。一方、台湾では社会主義思想の影響の下、文芸の大衆化を目標に、台湾話文による「郷土文学」の創作が提唱され、台湾人知識人の間で1930年から34年にかけて郷土文学論争と台湾話文運動が繰り広げられた<sup>5</sup>。在台日本人の間でも領台が40年にも及び、長期滞在者や台湾生まれの二世・三世が増えるにつれ、郷土意識や台湾意識が顕著になり、島田謹二や西川満も台湾という郷土に根ざした文学の必要性を訴えるようになったのである。台湾でもまた、「郷土」は1930年代のキーワードであった。

ところで、日本では吉江喬松が大正末期にプロヴァンス文学を紹介するに先駆け、ドイツ文学者片山正雄らによって明治末期以来、ドイツの「郷土文学」(Heimatkunst)<sup>ハイマートクンスト</sup>が盛んに紹介されており<sup>6</sup>、文芸界のみならず、思想界や教育界などにも無視できない影響を与え、日本の「郷土主義」の母体になっていた。それゆえ、日本で狭義の「郷土文学」といえば、20世紀初頭、ドイツで展開された郷土芸術運動のことであり、「郷土教育」も含め、「郷土」を論じる際、参照されたのはドイツ語文献である。そもそもドイツの郷土芸術運動は、文芸思潮的には自然主義や新ロマン主義等、外来の文芸思潮に対する批判から出発し、「郷土回帰」や「田園回帰」によって健全な国民文学の育成を目指すものであった<sup>7</sup>。また、社会の急激な近代化・工業化・都市化に対抗して、地方の文化的独立を擁護する立場を鮮明にしていたため明治末期以来、急激な近代化がもたらした矛盾に直面していた日本社会には無理なく受容されたのであろう<sup>8</sup>。しかし、ドイツや日本のように近代化が西欧起源の外来物として捉えられる場合、土着の伝統を温存する農村や郷土への回帰は、不可避的に反近代主義、民族主義、国家主義の様相を帯びてしまう<sup>9</sup>。中根隆行によると、明治末期から大正期にかけて、都会文明を批判し、農村文化や田園文芸に価値を見出そうとする反動的文明論が数多く見られたというが<sup>10</sup>、こうした思潮が底流となり、吉江喬松が深く係わることになる大正期の農民文芸運動や、昭和期の超国家的農本主義および日本浪漫派に至る水脈が形成されるのである。

一方、日本の植民地台湾ではドイツの「郷土文学」<sup>ハイマートクンスト</sup>が受容されることはなく、郷土文学論争においても批判的に論じられるに止まり<sup>11</sup>、島田謹二や西川満もモデルにしたのはドイツではなくフランスの「郷土主義」(régionalisme)<sup>レジオナリスム</sup><sup>12</sup>であった。島田や西川の場合、それは文学的な趣味に係わる選択ではなく、むしろ独仏の「郷土文学」が本来的に孕んでいた問題系の違いに、植民地台湾の日本人社会という受容する側の特殊性が組み合わされて、導かれた結果であろう。

そもそも文学作品の多くは時代や環境によって何らかの制約を受けており、ある地方を舞台にしたからという理由で、「郷土文学」と呼ぶことはできない。にもかかわらず、あえて「郷土」を文芸運動のテーマとして立ち上げるには何かしら必然的な理由があるはずで、20世紀初頭のドイツと日本の場合、それが外来の近代化によって破壊された伝統的郷土の回復にあったといつてよい。では、プロヴァンス文学の場合、そしてそれを受容した島田謹二と西川満の場合、何が契機となったのであろう。

本稿の目的は、フランスの「郷土主義」<sup>レジオナリスム</sup>が日本を経由し、在台日本人社会へと伝播した経緯とその過程で生じた変容の意味を検証しつつ、島田謹二と西川満が1930年代末に地方主義文学の育成を目指した歴史的意義を探ることである。彼らの「郷土主義」<sup>レジオナリスム</sup>の特性を明らかにするため、

日本内地の郷土主義を対比軸に据え、1930年代の在台日本人の郷土意識や、高揚する南進ブームが文芸運動に与えた影響についても検証する。なお、台湾人の提唱した「郷土文学」との比較考察も当然加えるべきであったが、紙幅の都合で割愛せざるをえなかった。別稿に譲りたい。

## 第1節 モデルとしてのプロヴァンス文芸復興運動

西川満が1933年3月早稲田大学を卒業した際、吉江喬松から「地方主義文学のために一生を捧げよ」との教えを受け、台湾に帰る決意を固めたことはよく知られている<sup>13</sup>。西川は恩師の期待に応えるべく、地方主義文学運動の領袖となることを目指した。

かく観じ来つて、つくづく思ふのは、開花期にある台湾の文芸は、今後あくまで台湾独自の発達をとげねばならないと云ふことである。断じて中央文芸の垂流や、従属的な作品であつてはならない。かのフレデリック・ミストラルが、南仏の寒村にあつて、巴里の都市文芸をも凌ぐプロヴァンス語による珠玉の詩を生み、遂に宏大な宮殿にも比すべき輝かしきプロヴァンス文学を樹立、心あるひとをして永く讃仰の声を発せしめたやうに、わが南海の華麗島にも当然その名にふさはしい文芸を生み、日本文学史上特異の地位を占むべきである。

これは、西川が日台文芸家の糾合を目指し、全島的な台湾文壇の建設を考えるようになったころ、『台湾時報』（1939年1月号）に掲載された文章である。同じころ、島田謹二もまた、西川を台湾におけるミストラルの継承者と見なし、「かの<sup>プロヴァンス</sup>Provenceの詩人達が方言の趣多きものと古言の純雅なるものとを復活して、その民謡を甦生せしめ、真の詩の泉を迸らせえたやうに、ねがはくは『媽祖祭』の詩人も、次にその詩境を<sup>ひろ</sup>展く時は、今迄の風物詩的世界に踟躕せず、更に根源的な普遍的な情緒を歌ふ民謡の世界を開拓して、華麗島文学に新しい驚異を与へ、すすんで日本内地詩壇にまで未聞<sup>みもん</sup>の新声をとほくひびかせてほしいと思ふ<sup>14</sup>」と論じていた。島田も西川もミストラルが中央文壇から自立したプロヴァンス文学を樹立したように、台湾にも独自の文芸を打ち立て、「日本文学」において特異な地位を獲得しなければならないと考えていたのである。

もともと島田謹二は『海潮音』の比較文学的研究を通して、プロヴァンス文学には早くから興味を示し、1935年にはプロヴァンス文芸復興運動のメンバーの一人である詩人テオドール・オーバネル（Théodore Aubanel, 1829-1886）についての論文「小鳥でさへも巢は恋し」を発表していた<sup>15</sup>。ここで島田は上田敏訳で親しまれたオーバネルの詩「故国」を取上げ、上田がプロヴァンス語の「paradi」を英訳から「波羅葦増雲」と訳したため、この詩が現実的な郷土愛ではなく、形而上的な魂の故郷を謳ったものになってしまったこと、しかしこれはもともと、「プロヴァンス新文学フェリイブル結社<sup>16</sup>」結成の翌年、1855年に創刊された『プロヴァンス年鑑』（Armana Prouvençau）の巻頭を飾る詩史的意義に富んだ「フェリイブルの歌」の一部で、「故郷プロヴァンスはさながら楽園だ」という意味であることを明らかにしたのであった<sup>17</sup>。「故国」という詩が「南

欧碧空の下に生まれた人人の<sup>うぶすな</sup>産土の讃歌」であることを高らかに告げたこの論文は、『文芸台湾』が創刊された直後、第2号に転載されるのだが、このことから、二人が自分たちの文芸運動をプロヴァンスの文芸復興運動と重ねようとしていたことがうかがえよう。

では、実際にプロヴァンスの文芸復興運動はどのように生まれ、展開したのだろうか。先に、ドイツの郷土文芸運動は外来の近代化に対する抵抗を契機としたと述べたが、プロヴァンス文学の場合は簡単にいって、フランス国内で歴史的に形成されてきた南北問題が引き金であった。つまり「北」の支配民族（ゲルマン民族の一派であるフランク族）に対して向けられた、言語も文化も異なる「南」の被支配民族（ラテン民族）の抵抗であり、自治の要求である。北＝中央の言語帝国主義や文化的抑圧に対する、南＝地方からの異議申し立てといってもよい。

フランスでは紀元後4世紀、ゲルマン人の大移動によってフランク族がガリアの地に定着したが、その支配と影響が及んだのはロアール川の北部までで、南部にはローマの影響が残存し、今日にまで続く南北の文化的な違いが形成された<sup>18</sup>。8世紀ころからは北仏語(<sup>ラング ドイル</sup>langue d'oïl)とかなり相違した南仏語(<sup>ラング ドック</sup>langue d'oc)が発生し、この南仏語で書かれた文学が広義のプロヴァンス文学と呼ばれる。南仏語は当時、西欧で最も完成された俗語で、12-13世紀ごろ絢爛たるプロヴァンス文学が開花するが、異端討伐の大規模な虐殺が起こったことから急速に衰退してしまった。一方、14世紀以降パリ地方の方言が標準語として確立され、17世紀にはフランス語を「国語」として統一する機運が高まる。フランス革命も国語の普及に拍車をかけた。それに対し、18世紀中葉からプロヴァンス文芸復興の機運が起こり、19世紀初頭にかけて、プロヴァンス語や文学の研究が盛んになった<sup>19</sup>。プロヴァンス語の辞典や新聞、週刊誌も創刊され、パン屋や理容師等職人出身の詩人も輩出する。

こうした機運に乗じ、1854年7月21日、フレデリック・ミストラルや彼の師ジョセフ・ルーマニュー(Joseph Roumanille, 1818-1891)をはじめとする7人の青年詩人たちが、アヴィニョンでプロヴァンス文芸復興運動の組織フェリブリージュ(Félibrige)を結成、翌年1月には機関誌『プロヴァンス年鑑』を創刊し<sup>20</sup>、プロヴァンス語の顕揚に乗り出したのである。フェリブリージュ結成の目的は、プロヴァンスの言語と文学の復活を通して、南部の民衆の誇りやラテン民族の感情を回復することであり、そのため彼らは、長い間、方言として貶められたプロヴァンス語の綴字法と文法の確立にも力を注いだ。フェリブリージュはまた、政治的色彩を色濃く備えた結社でもあり、南仏全体を視野に入れた地方自治の確立や、ラテン民族復権のためイタリア、スペイン(特にカタロニア地方)、ルーマニアを含むラテン民族連盟の結成を主張した。

島田謹二と西川満はこうした事情をどこまで把握していたのだろうか。吉江喬松の影響が大きい西川とは異なり、島田はフランス語の文献を通してフェリブリージュの活動を直接理解していたと思われるが、実際には多くを語っていない。先に挙げたオーバネル論「小鳥でさへも巢は恋し」でも、以下のようにわずか数行を充てただけである。

今、プロヴァンス新文学フェリブリージュ結社の成立史を顧るに、詩祖ペトルルカに因みあるヴォオクユウズのシャトオヌフ・ドゥ・ガダニユの近く、フォン・セギューヌに七人の若い詩人達が集って、プロヴァンス文学の復興を策し、盟主ミストラルがマイヤヌで集めた伝説

詩中より「フェリイブル」の語を見出し、これを以て新詩社の名としたのは、千八百五十四年三月二十一日のことであつた<sup>21</sup>。

論文全体からは、島田がオーバネルの郷土愛を十分理解していたことは伝わってくるものの、言語と文学の復興を通した民族精神の回復というフェリブリージュの核心的な理念は見えてこない。オーバネルがミストラルとは異なり、政治には距離を置いた愛の詩人であつたこと<sup>22</sup>、および島田が参照した伝説文献には民族主義的色彩が比較的薄かつたこととも関係があるだろう<sup>23</sup>。

西川満も前出の通り、「かのフレデリック・ミストラルが南仏の寒村にあつて、巴里の都市文芸をも凌ぐプロヴァンス語による珠玉の作品を生み、遂に宏大な宮殿にも比すべき輝かしきプロヴァンス文学を樹立」したと記してはいるものの、そこにミストラルの民族的なルサンチマンを読み取ることはできない。だいたい、「南仏の寒村」という認識にも相当のずれがあり、島田も西川もフェリブリージュを過小評価していたように思われる。実際、フェリブリージュは1870年代後半以降、爆発的に発展し、その影響は「南仏の寒村」の域をはるかに越え、プロヴァンスの近隣諸地域からフランス全体、ひいては周辺諸国にまで及び、文芸のみならず、政治、経済、教育等広汎な分野にわたっていた。

<sup>レジオナリスム</sup> **régionalisme** という語は、フェリブリージュの発展過程で、1874年、詩人ベルリュック・ペリュサ (Berluc-Perussis) によって考案されたものだが、もともとはミストラルによって生まれた「地方分権化」(<sup>デセントラリザシオン</sup> **décentralisation**) や「連邦主義」(<sup>フェデラリスム</sup> **fédéralisme**) といった政治構想を内包する思想であつた<sup>24</sup>。さらにこの<sup>レジオナリスム</sup> **régionalisme** の思想は、モンペリエ生まれのフェリブリージュ会員ジャン＝シャルル・ブラン (Jean Charles-Brun, 1870-1946) が、1900年にパリでフランス地域主義連盟 (la Fédération régionaliste française) を立ち上げ、主著『地域主義』 (*Le Régionalisme*, 1911年) を刊行するや、フランス全土に広がり、各地で政治・経済・文化的 **régionalisme** の動きが活発化する<sup>25</sup>。もともと世紀の変わり目のフランスでは、19世紀全体を通じて確立された絶対的中央集権体制の下で中央と地方の格差が深刻化し、さらに普仏戦争の敗北による傷跡が各地の青年層に郷土回帰的なナショナリズムの心情を育み、それらが **régionalisme** の全国的な展開を促したのであつた。ただしフランスの場合、ドイツの郷土文芸運動とは異なり、**régionalisme** をめぐる議論において、近代化の問題が前面に出ることはなかつた。実際、フェリブリージュが発足した1850年代から20世紀初頭にかけて、フランスでも近代化や工業化による伝統社会の破壊は深刻さを増していたが、彼らはその原因をあくまで過度の中央集権体制に求めたのである<sup>26</sup>。ミストラルの場合、中央批判に加え、ラテン民族主義が濃厚だったため、「分離主義者」と非難されることもあつたが、一般的にはむしろ、極度の中央集権体制こそ国家の弱体化や国際的な地位の低下を招く原因と見られ、反中央集権・地方分権化の要求は国力の増強というナショナリズムと結びついていた。

**régionalisme** の教義の伝播には各地の詩人や芸術家が郷土意識の覚醒者として大きく貢献したといわれるが<sup>27</sup>、実際、19世紀末以降、フランスでは地方文芸の隆盛が著しく、現在では「ベル・エポックの **régionalisme**」と呼ばれるほど、各地に郷土作家が輩出したほか、文芸団体も結

成され、文芸誌の出版が相継いだ<sup>28</sup>。その結果、フェリブリージュの運動そのものが広義の *régionalisme* の中で見直されるようになり、運動の意義やミストラルの思想も高い評価を得るに至る。1910年代から20年代にかけては、フェリブリージュの形成史や、ミストラルをはじめとする個々の詩人に関する優れた研究も次々と生まれた<sup>29</sup>。これらの研究は大きく二方向に分かれるが、一つが、普遍的な *régionalisme* の立場から、もう一つが、あくまで南仏固有の歴史や文化の視点に立つ研究で、当然、後者には民族主義的色彩が強い。ただし、両者とも絶対的な中央集権体制に対する地方の抵抗、という大枠では一致していた。

ここで特に注意したいのは、ちょうどこの時期、1916年から20年まで、吉江喬松がフランスにいたという点である。特に第一次世界大戦後は *régionalisme* が再度、高揚した時期であり、「緩慢な死」ともいわれるほど深刻化した地方の疲弊によって、ミストラルの名が地方活性化のシンボルとして呼び起こされたのであった<sup>30</sup>。吉江は『世界文芸大辞典』の「レジオナリズム」の項目を執筆した際、シャルル・ブランの『地方主義文芸・美学』<sup>31</sup>、およびフロリアン・パルマンティエの『現代仏蘭西文学史——1885年より1914年まで』を参考文献として挙げているが、特に後者では現代フランス文学における地方主義文学の隆盛が詳細に紹介されていた。

## 第2節 吉江喬松という媒介

西川満は「歴史のある台湾」というエッセイの中で、「己の住む土地の歴史、己の住む土地の文学を、何よりも重んずべきことを、私は他でもない、仏蘭西文学から学びとつたのである。仏蘭西程、地方固有の文化を尊重する国を私は他に知らない。もし私が仏蘭西文学を勉強しなかつたとしたら、恐らく終身、己を育ててくれた台湾に興味を持ち得なかつたであらう<sup>32</sup>」と述べている。しかし実際のところ、フランスでは17世紀後半から早くもパリを中心に進められた文化統合によって、地域言語による文芸作品はほぼ壊滅状態に陥り、お世辞にも「地方固有の文化を尊重する国」とはいえない状況にあった<sup>33</sup>。にもかかわらず、西川にこのような印象を抱かせたのは、*régionalisme* の高揚期にフランスにいた恩師吉江喬松の影響が大きい。吉江は『仏蘭西文学概観』などで、「地方的小説家」による地方文芸が「現代仏蘭西文芸の素地をつくつて」おり、第一次大戦後は特に、「非常な勢ひでつくりだされつつある」と述べていた<sup>34</sup>。

島田謹二より21歳、西川満より28歳年長の吉江は、1879年9月7日、長野県東筑摩郡塩尻村に生まれた。吉江家はもともと広大な旧家であったが、父が事業に失敗したため没落し、吉江は松本中学卒業後のほぼ3年間、畑の耕作、山林の伐採、養蚕の手伝いなどに明け暮れる。しかし、文学への思いが断ち切れず、1902年、早稲田大学文学部文学科に入学した。卒業後、1910年には早稲田大学文学部英文科講師になり、1916年、フランス留学に旅立つ。1918年春、吉江は第一次大戦下の爆撃が激しさを増したパリを逃れて南仏に向かい、小牧近江<sup>35</sup>と共にプロヴァンスのフレデリック・ミストラルの家を訪ね、未亡人の歓待を受けた<sup>36</sup>。1920年に帰国すると、「ミストラルの家」や「南國」などのエッセイで、フェリブリージュやミストラルを紹介する文章を次々と発表する<sup>37</sup>。

千八百五十四年に、ミストラルを初めとして七人の詩人等が起した、所謂 *Félibres* の運動は、南国の美を凡ゆる方面に於いて復興せしめようとしたのであつた。言語に、伝説に、宗教に、歴史に、南国独特の美の発揚、それが彼等の目的であつた。 ミストラルは詩人として、[...] プロヴァンサルの特徴特美を発現し、更に誇るべき南国人特有の精神をかき立てて、ここに「南国復活」の指導者として終始した<sup>38</sup>。（下線：橋本）

石塚出穂は上記引用部分について、「注目すべきは、吉江がこの復興運動の構成員や成立の経緯を伝えるだけでなく、言語・文学の復興を通じて民族の魂の復権を目指す運動の理想を正しく指摘し、ミストラルをその精神的指導者と捉えていることである<sup>39</sup>」と述べている。しかし、吉江が言語・文学の復興を通じた「民族の魂の復権」を理解していたことと、それにどれほどの重みを置いていたかは別の問題であろう。留学前から吉江はケルトの文芸復興などにも見える民族精神復権の試みに関心を寄せていたというが<sup>40</sup>、フェリブリージュ創立時の理念やミストラルの思想をどれだけ日本に伝ええたかは疑問の残るところだ。実際、吉江がここで繰り返しかえし強調しているのは、何よりもプロヴァンス文学の「南方の美」である。

むしろ吉江はフェリブリージュやミストラルについて、民族主義的色彩を薄め、より普遍的な「レジオナリスム地方主義」に回収した上で、農民文学という別の経路を通して日本に紹介したのではなかっただろうか。西川満が生涯にわたって大いなる影響を受けた恩師と、農民文学という結びつきは想像しがたいのであるが、実際、吉江は大正期の農民文芸運動に深く関わっているのである<sup>41</sup>。

吉江がフランスから帰国した翌年の1921年10月、小牧近江が『種まく人』を創刊すると、彼も執筆協力者として名を連ねた。翌1922年11月、二人はフランスの作家シャルル＝ルイ・フィリップ（Charles-Louis Philippe, 1874-1909）の13回忌記念講演会を企画し、吉江が「大地の声」と題した講演を行う。それが多大な反響を呼び、「農民文芸研究会」（1924年、「農民文芸会」に改組）の結成に至るのであるが、これは日本における「農民文学史」の一ページを飾る記念碑的な出来事であった<sup>42</sup>。研究会結成の背後には、第一次大戦後、「我々日本人の大多数を構成するものはこの農民である」にもかかわらず、「田園の荒廃は年と共に目立」ち、「しかも現在の日本の文学からは殆ど閑却されてある」という状況があった<sup>43</sup>。農村改革のためには、農民運動による制度改革と同時に、因襲や封建思想に捕らわれた農民の意識改革が必要であり、農民を啓蒙し、解放するために、吉江らは農民自身による、農民のための農民文学を提唱したのであった。

当初この研究会が、吉江を中心にヨーロッパの農民文学を積極的に研究・紹介していたこともあり、椎名其二、犬田しげろ卯、和田伝等のメンバーや吉江の友人水野葉舟によってミストラルについての文章や翻訳が次々と発表される<sup>44</sup>。しかし、いずれも「野の詩人」としてのミストラルに関心を寄せたに止まり、「民族の言語と魂の復権」というフェリブリージュの理念が言及されることはなかった。特に犬田と和田が著したミストラルやフランスのレジオナリスム地方主義に関する小論文には吉江の指導の跡がありありとうかがえるのだが、吉江も含め、ミストラルを普遍的な「レジオナリスム地方主義者」と捉えた上で「農民文芸」の文脈に据えたため、もともとミストラルの中心を占めていた民族主義的な主張は後景に退いてしまった。富農出身のミストラルは確かに代表作『ミレイユ』

(*Mirèio*, 1859) で伝統的な農村を描いてはいるが、それはあくまでプロヴァンスの伝統文化や民衆の風俗を顕揚するためで、農村改革や農民解放を意図していたわけではない。

しかし、吉江喬松がフランスで眼にした *régionalisme* の動向や、主な参考文献がシャルル・ブランやフロリアン・パルマンティエの著作だったことを考えると、ミストラルが広義の<sup>レジョナリスム</sup>地方主義を媒介に日本の農民文学と結びついてしまったのも不思議ではない。そもそも日本には抑圧された民族の言語と魂の復権という理念を共有する土壌がほとんど存在しなかった上、明治末期以来、文芸界にはすでにドイツの郷土文学が浸透していたこともあり、プロヴァンス文学は都市文明に批判を呈し、地方の失なわれゆく伝統を描く「郷土文学」として受容されたのである。フランスの *régionalisme* の思想は、20 世紀初頭以降、南仏の枠を越え、共和国全体の地方分権化の要求へと普遍化されてはいたが、吉江喬松を通して日本の農民文芸運動の文脈に接続されるや、今度はドイツ起源の反近代的郷土文学の系譜に回収されることになったのである。和田伝はフランスの<sup>レジョナリスム</sup>地方主義もドイツの郷土文学と同様、産業革命がもたらした近代都市建設と田園の衰退が原因であるとし、日本の農民文学との接点を見出そうとしていた<sup>45</sup>。しかし、<sup>レジョナリスム</sup>地方主義を農民文芸の一項目に規定はしたものの、結局、農村改革を最終目的とする農民文芸会の「農民文学」と、「民族の言語と魂の復権」を目指したミストラルを結びつけるには最初から無理があり、プロヴァンス文学の研究がそれ以上進展することはなかった<sup>46</sup>。

ところがそれは 10 年の後、島田謹二と西川満によって、台湾で突然、花開く。ただし、同じく吉江喬松を媒介としつつも、島田や西川の場合、プロヴァンスの文学をドイツの「<sup>ハイマートクンスト</sup>郷土文学」や日本の「農民文芸」にも通じる「郷土文学」と捉え、自分たちの文芸運動のモデルにしようとしたわけではなかった。島田謹二はまだ東京外国語学校の学生であった 1922 年前後、西条八十編集の文芸誌『白孔雀』(1922 年 3 月創刊)を通して、吉江喬松に出会っていると思われるが<sup>47</sup>、島田が当時、農民文学経由でプロヴァンス文学に興味を示した形跡はない。1930 年に早稲田大学に入学した西川満も、農民文芸の観点からプロヴァンス文学に接したわけではないだろう。

ではなぜ、彼らが 1930 年代後半の台湾で、プロヴァンス文学を引き合いに出したのかというと、農民文芸とはまた別の経路、つまり吉江の中に潜んだ一種の「南方憧憬」ともいべき、「南欧」への憧れが浮かび上がってくる。

もともと信州の厳しい自然の中で育った吉江喬松ではあったが、留学先のパリも冬は灰色の雲に暗く閉ざされており、おまけに第一次大戦中であつたため灯火管制は厳しく、連日の爆撃で避難生活を強いられていた<sup>48</sup>。それから逃れるため、吉江は 1918 年の春、光あふれる<sup>ミディ</sup>南仏を訪れる。長距離砲の砲弾が爆裂し、悲惨な光景が演じられるパリとは著しく異なり、昔ながらの静けさと、平和とが行き互る南仏の光景は吉江の心を深く捉え、「南方」への憧れは 2 年後の春、彼をイタリアにまで赴かせた。日本に帰国した後、吉江はそれらの印象を「南國」、『南欧の空』等の紀行文にまとめ、エッセイ「南方の美」で総括する<sup>49</sup>。そこで吉江は南方の光をあらゆる文明の源と捉えた。

吉江はこのエッセイを、「南方を恋ふる心は、我々日本人にとっては、もつとも自然なことのやうである」と始めるのだが、彼にとって日本人の恋うる「南方」とは、日本から見た地理上

の南方ではなく、進化した文明発祥の地「南欧」であった。ルネサンスの精神を深くたたえ南欧には、現在でもギリシャ・ローマに起源を持つ文明の光が満ち溢れ、それに吉江はノスタルジーと強い憧れを抱く。彼は、グレコ・ラテン的な南方的要素とゲルマンや北欧の北方的要素とを対比させ、南の特質は「共通的で、集中的で、理智的で、ティピック」であるのに対し、北の方は「個的で、分散で、神秘で、独自の」と分析した。その上で、北方的要素も実は南方的な光を必要としており、結局、南方的な光明を生命や文明や創造の源と見なすのである。最後に吉江はこのエッセイを、「我々が常に持つ光に対するノスタルジイをして、現存のままで、我々の中に充たさしめよ、これが我々の現在に於いてなすべき努力である」と、締めくくった。

この吉江の「南欧憧憬」は、後になって台湾という「南方」育ちの弟子西川満に投影される。西川が早稲田大学を卒業して台湾に戻る際、「南方の美」に認められた「南は我々に光明と秩序と、華やかさと歓喜とを提供する」という言葉を、吉江がはなむけとして贈り、西川がそれを詩誌『媽祖』創刊号の巻頭に掲げたことはよく知られている<sup>50</sup>。吉江が西川に「地方主義文学のために一生を捧げよ」と語った背後には、西川に台湾のフレデリック・ミストラルとなって、理想的な南方文芸を打ち立ててほしいという願いが込められていたのであろう。日本の農民文芸運動が受容できなかったプロヴァンス文学の「南方の美」を発揚できるのは、台湾というもう一つの南方だったのかもしれない。西川も師の教えを忠実に守ろうとした。1939年1月、「台湾」のための文学運動を起こそうとしていたとき、西川は次のように書いている。

嘗て筆者が、ひきとめる友の手をふりきつて、ただ一人郷土台湾に帰らむとする折、吉江喬松博士は心より賛せられ、

南方は光の源  
我々に秩序と  
歓喜と  
華麗とを与へる

の詞をはなむけにされたが、まさしく南海の文学こそは何よりも正しき秩序、そして歓喜と華麗とをもつにふさはしい。ひとよ、今日以後、いたづらに東京文学を範とするをやめよ。[……]南は南、北は北、明るく澄みわたる光の国にありながら、いつまでも暗い北国の雪空を思つて何になる。日本はやがて台湾を中心として南に伸びてゆくであらう。[……]華麗島の文芸をして、南海にふさはしき、天そそり立つ巨峯たらしむること、これがわれらの天職である。<sup>51</sup>

あるいはまた西川が「鬼谷子」のペンネームで、「そして、新しき南方のリアリズムをして勝利あらしめよ。香高き南方のロマンチズムをして光榮あらしめよ。炎と燃ゆる南方のサンボリズムをして凱歌あらしめよ！<sup>52</sup>」と叫ぶとき、そこには強い絆で結ばれた師弟の「南方憧憬」が照応しあっているのが見て取れる。

「いつまでも暗い北国の雪空」に思いを馳せ、内地の文学の模倣に明け暮れるのではなく、台

湾という「南方」の地で独自の文学を育てようとしていた西川や島田にとって、吉江の南方賛美は一つの啓示となったのではないだろうか。それはまた、台湾総督府が鼓舞する「南進政策」によって、「南方文化の建設」が喧伝される時代でもあった。

### 第3節 在台日本人の「郷土主義」

ところで、「地方主義文学のために一生を捧げよ」との恩師の言葉を胸に、1933年4月、台湾に戻った西川満であったが、それはちょうど内地で盛んに展開されていた郷土教育運動が台湾にも非常な勢いで上陸し、ピークを迎えていた時期でもあった<sup>53</sup>。台湾各地で『郷土読本』が大量に編纂されるようになり、1934年には、ゆきすぎた風潮に反省を求める声も出てくるが、依然として「教育界は挙げて郷土教育研究施設に全力を傾注」しており、「文政当局はこの新興教育の普及実施のために五十万円の予算を計上し、[……]各地の講習会、研究発表会は『…の郷土化』『郷土化の…』といふ講演、発表を唯一の武器とし」、「郷土」の語を冠する多くの書籍や印刷物が恰も雨後の筍の如く簇出する現状<sup>54</sup>」だったのである<sup>55</sup>。

しかし、現場で郷土教育の教材、特に歴史教材の編纂に当たった教師たちは、小学校はともかく、公学校児童にとって郷土教育は時には「返つて有害でさへある<sup>56</sup>」ことを見抜いており、編纂には「多大な注意<sup>57</sup>」が払われていた。その結果、郷土読本の中身は往々にして統治者の立場に立った歴史観により、植民統治を正当化するような内容となった。台湾の歴史はあくまで「我が国民の台湾に於ける発展の跡をしらしめんとするもの<sup>58</sup>」として記述され、台湾社会の安定や発展といった日本による統治のプラス面が強調されたのである。結局、台湾における郷土教育の目的は日台人児童に「植民地台湾」を認識させた上で、郷土意識を育成することにあつた。しかし、「郷土見つめて役立つやうに、最後の目当ては国の為<sup>59</sup>」と謳われるように、郷土意識の育成とは「畢竟国民教育の徹底を期するため<sup>60</sup>」であり、国家に忠実な国民精神の涵養を目的としていたのである。

馬公第一公学校教師の山本呑海はこうした郷土教育の本質を見抜いていた。山本によると、日本内地でこの時期、教育の全分野を席卷していた郷土教育はドイツの郷土教育や郷土主義から多くを汲み、「郷土」は個人ハイマートの人格や精神形成の揺籃として、非常に重要な役割を付与されていたという。満州事変以後、国際情勢の危機に直面していた日本の社会的・思想的状況が「真の日本人意識」の形成を必要とした結果、明治初年以来、模倣してきた欧米の教育制度や教育組織を改め、「日本に還れ」をモットーとする「日本主義郷土教育」が提唱されたのであつた。また、従来の知育偏重教育が国家に危険思想をもたらしたことへの反省として、児童の情意の陶冶や全人格の育成が目指されたが、そうした郷土教育に重大なる役割を演じていたのが、当時、日本の思想界に大いなる影響を与えていたファシズムである<sup>61</sup>。

実はこの西洋の抽象論を捨てて郷土日本に回帰し、具体的なレーベン生の価値を主張して心情主義に基づいて行動するという指針こそ、「日本の対外的緊張が増大し、資本主義恐慌の打撃が農村において深刻化するとともに、祖国＝郷土の敵を攻撃しながら立ちあらわれ」た、1930年代日本の「郷

土主義」の中核をなす理念だったのである。農村の救済から出発した橋孝三郎らの農本主義や保田与重郎らの日本浪漫派も同様な構造を備え、いずれも日本ファシズムと分かちがたく結びついていた<sup>62</sup>。この「国家主義」に直結した「郷土主義」は、1930年代初頭から中葉にかけての帝国日本のキーワードであったといっている。台湾で郷土教育が盛んに論じられたのもその一環であった。

しかし、こうした日本主義的郷土主義が台湾に何の抵抗もなく受容されたのかということ、決してそうではない。当時、郷土／地方熱は教育界だけではなく経済界にも浸透しており、『台湾時報』にも、「募集！地方色ある原稿 本誌は三月号以来連載中の『台湾経済風土記』を先鋒として、地方色の編入に努力致して居ります。何卒奮つて御応募下さいませ<sup>63</sup>」（1933年9月号）、という募集広告が掲載されていた。地域（産業）の振興が帝国（経済）の発展につながるという論調は、台湾各地の地域産業を紹介する「台湾経済風土記」の中でも明らかであるが、注意すべきは、台湾にはこの時期、教育界を席卷していた「郷土のためは国のため」という、いってみれば上からの官製「郷土主義」とは別の、「台湾本位」という下からの「郷土主義」が芽生えていたことである。

台湾電力社長の松木幹一郎は1936年の談話で、「台湾の島民の生活を樹立して行かう」と、台湾社会の自立的発展を促すと同時に、「台湾の天然資源は日本帝国の所有物であつて台湾島民だけの所有物ではない」、「台湾といふものは帝国の領土である。だから台湾の島だけが独立して居るやうに考へることは非常な間違いである」と、強調している。実は、松木がこう主張した背後には、「私共は台湾に行つて一番初めに民間の人から、**台湾本位**といふことを耳にタコの出来るほど聞かされた」という事情が存在していたのである。台湾本位というのは、「島内の利益はみな島内に取らう」という一種の台湾経済自立論であった<sup>64</sup>。

台湾統治も40年を過ぎて在台日本人社会が土着化するに従い、台湾本位という意識が芽生えたのは当然のことであろう。1930年代後半の台湾の立場をよく示しているのは、台湾自身の立場に固執するよりも、国策の大方針に添って進むべきではあるが、かといって内地依存の他力本願ではなく、台湾独自の立場から国策を指導啓発してもいいのではないかというような、積極的論調であった<sup>65</sup>。

文学方面では、在台日本人が「郷土」を頻繁に口にするのは少々遅れて1939年のことである。俳句作家など一部の日本人の間では、早くから台湾独自の文芸活動を目指す動きがあったものの、「郷土文学」の必要性については慎重論も見られた。1940年の台湾文壇で活躍する新垣宏一などは台湾人の唱える「郷土文学」を視野に入れながら、1930年代後半の時点では、「たゞ台湾にゐる——といふハンデキャップだけを利用して、自分の創作的なウデマへの鍛錬をせず、ローカルカラーばかりを売りものにするのは、ちよつとずるいみたいです<sup>66</sup>」と、「郷土文学」を全面的には支持していない。地方色の強調はともすれば内地文壇進出のための、未熟な技術を補う方便になりかねないという危惧が働いていたのだろう。しかし、西川満を中心に文芸運動の機運が高まるにつれ<sup>67</sup>、「事実、如何に学問があり、才能があらうとも、郷土を愛さざるものは、台湾に住む権利を自ら放棄した人間である。よろしく職を辞して台湾を去るべし。[···] 而して作家は、あらゆる罵詈雑言にも屈せず、この郷土に於いて作品を発表し、郷土に殉ぜよ<sup>68</sup>」などという論調

も、珍しくなくなる。

そもそも内地文壇からの自立意識が最も鮮明なのは俳句界であり、明治末期に渡台した渡辺香墨の時代からすでに台湾に根ざした「台湾俳句」が主張されていた。やはり「台湾俳句」を標榜する台湾最大の俳誌『ゆうかり』では、1935年ころから在台日本人が台湾で制作し、台湾の俳誌に投稿し、台湾在住の選者が選ぶという、一種の「自治」状態に到達する。島田謹二が文学のレジオナリズムと呼んだのも、まさに渡辺香墨に発する「台湾俳句」の系譜であった<sup>69</sup>。『ゆうかり』では内地からの旅行者が詠む現実に即さない台湾俳句の陳腐さがたびたび批判され、1939年には毎号のように、「台湾といふ基礎より出発<sup>70</sup>」することの重要性が強調されている。

こうした台湾における文芸の自治意識は島田謹二や西川満にも鮮明で、島田は「維新以来、中央賛美の伝統は文芸の分野でも極端に行はれ、東京文壇はあらゆる才能の士を吸収し終つて、地方は文化的に荒蕪の地と化しつつある」と、文芸生産の場という観点から中央集権的な現状を批判し、「東京文壇のその時その時の流行を追うて、その拙劣なる模造品の制作に憂身をやつすのではなく、「この地独自の文学を創作」すべきであると、作家たちに意識改革を求めた<sup>71</sup>。西川も「開花期にある台湾の文芸は、今後あくまで台湾独自の発達をとげねばならない」、「断じて中央文芸の亜流や、従属的な作品であってはならない」と力説している<sup>72</sup>。ここで注意すべきは、島田や西川が中央文壇からの自立を訴えるときに、プロヴァンス文学を引き合いに出している点である<sup>73</sup>。二人がミストラルの政治性を十分理解していたとは到底思えないが、少なくとも「野の詩人」としてしか捉えられなかった犬田卯や和田伝ら農民文芸会のメンバーに比べ、ミストラルの鮮明な反中央意識を重視していたことは確かである<sup>74</sup>。島田や西川にこのような理解が可能だったのは、パリとプロヴァンスの関係を内地と台湾の支配・被支配関係というアナロジーを通して認識していたためであろう。加えて、当時、台湾の日本人社会が変容しつつあったことも挙げられる。

日中戦争勃発以降、内台一体化が叫ばれ、皇民化運動や国民精神総動員運動が強力に推進されてはいたものの<sup>75</sup>、台湾に長期居住する日本人にとって「湾化」は避けられず<sup>76</sup>、「湾生」と呼ばれる移住二世・三世も増えるにつれ、在台日本人社会には内地とは異なる郷土意識・台湾意識が芽生えていたのである。「内地にない風物、そしてその環境と人、さうしたものに関心を向けるにしても、旅行者のやうな眼で見てはならぬ。われわれはあくまで台湾の作家であることを牢记すべきだ<sup>77</sup>」というように、作家たちもまた内地の作家との間に線を引き始めていた。1938年5月号の『台湾公論』には、「内地の文士は台湾の嘘を書く」というタイトルの下、内地で出版された台湾関連の小説に触れ、「是等読物のミスは作者が台湾意識を持つてゐないからであつて、斯云ふ嘘を公表される事は、台湾として迷惑至極であらねばならぬ<sup>78</sup>」（傍点：橋本）との批判が掲載されている。すでに在台日本人の間で「台湾意識」の有無が問題にされるような時代になっていたのである。

こうした在台日本人の郷土意識・台湾意識は1940年代に入るとさらに一歩進み、『民俗台湾』にたびたび見られるように、「わが郷土台湾」、「われわれ台湾島民」という意識、さらには内地の日本人に対する対抗意識にまでエスカレートしていく<sup>79</sup>。この種の「郷土意識」は内地からの「分離主義」や「連邦主義」に発展しかねない可能性を秘めていたはずだが、実際この時期台湾では、

台湾を中心とした南方地域の再編成という、より広域の「地域主義」<sup>レジオナリスム</sup>が模索されるようになり、文学の枠組みもそれにつれて変容しようとしていた。

#### 第4節 南方文化の建設へ

後藤乾一によると、1935年日本国内で起きた「南進論」をきっかけに、台湾では在台日本人の間で「南進ムード」が急速に高まり、特に小林躋造総督が1939年5月、「皇民化、工業化、南進化」をスローガンに掲げると、未曾有の「南進ブーム」が起きたという。南進政策は台湾に南進基地としての重要性を与え、それを機に南方経済圏と連動し、経済的に自立することを望む日本人が、「反中央的な在台邦人ナショナリズム」を形成するようになった<sup>80</sup>。それはまた、「内地延長主義を採つてその一喜一憂に左右される限り、台湾独自の発展—南方への飛躍は到底図り得ないのではあるまいか」という内地依存への批判であり、「されば台湾は今こそ東亜の大局に立ち、南方への活眼を開いて不動の対策を講ずべきであらう」というように<sup>81</sup>、台湾を中心とする南方圏の再編成という一種の<sup>レジオナリスム</sup>regionalisme（地域主義）の萌芽でもあった。

実際、南方共栄圏の確立という課題は、太平洋戦争勃発以後、日本帝国全体にとって喫緊の課題となるが、台湾は地政学的な関係もあり、早くから「南方政策の基地或は拠点として、内地には見られないほどの緊張した状態<sup>82</sup>」にあった。適切な政策に早急に取り掛からなければ、南方発展の捨石になってしまうかもしれないという危機感が背後にあったのである。それゆえ1930年代末から、政治・経済方面だけではなく、台湾を「南方文化開発の本拠」に、というスローガンが叫ばれるようになっていた。島田謹二もまた台湾独自の文学は南方文化の中心として発展すべきことを強調している。

況んやわが台湾は、東亜聖戦第三年の春を迎へてより、大和民族の発展上いよいよその重要性を加へ来つた南海の大拠点として、自他ともに認識せらるるに至つた。政治上、軍事上、経済上の大活動は既にわれわれの眼前にある。文芸ひとりこれに遅れてよいであらうか。われわれはわが民族の文芸的創作力の未来を信ずる<sup>83</sup>。

島田謹二というと、往々にしてブッキッシュなロマンティストと見られがちだが、ここには時代の動きに敏感なリアリストたる一面が垣間見える。彼が台湾の文芸を南方文化政策の一環として育てようとしていたことは明らかであった。ところが、肝心の南方文化政策そのものが1930年代末の時点ではまだ掛け声だけの、手探り状態だったのである。1940年9月、台湾に財団法人南方資料館が設立され、以後、南方関連書籍の大掛かりな収集が始まるのだが<sup>84</sup>、1942年から44年にかけて、経済、農業、工業、自然科学、医療等多方面にわたる膨大な数の南方関連書籍が出版されたにもかかわらず、文化に関するものは依然として少なかった。研究に関しても、台湾では「自然科学的或は技術的調査の分野が著しく進んでゐるのに対し、南方土俗及び歴史学等特殊なものを除いて、政治・経済・社会など一般文化方面の研究が立ち遅れてゐる」と指摘されている。

「外交戦」や「経済戦」に次いで「文化戦」の重要性が認識されるようになった割には、「南方諸地域の文化的建設をいかにすすべきかについては、いまだ充分明確な方策が樹立されておらずに思はれる」というような状態であった<sup>85</sup>。1940年代に入ってからでさえこのような状態であるならば、1930年代末の南方文化建設論が十分成熟していなかったとしても、驚くにあたらない。

実際、1938年11月、前台北帝国大学総長幣原<sup>あきら</sup>坦が時代の要請に答えるように、『南方文化の建設へ』（富山房）を出版するが、それは幣原自身言う通り、南方文化を「自ら建設すると云ふがごとき誇示ではなく<sup>86</sup>」、実際には過去の日本の南方関与を辿ることによって、現在の南方進出を正当化することに重点が置かれた「南方文化史」であり、「南方文化」そのものについての研究は閑却されていた。幣原は早くから台湾を「南方文化の淵藪たらしむる」ことに関心を抱き、「南方文化の振興に貢献」すべく台北帝大の運営にも当たっていたが<sup>87</sup>、実際、彼がどのような「南方文化」の建設をイメージしていたのか、著作からは見えてこない。しかし、これは何も幣原一人に限らず、1930年代末期、「南方文化」を口にする日本人知識人に共通した現象であった<sup>88</sup>。

実際、南方文化建設について内地でも真剣に論じられるようになるのは、1942年以降であるが、結局は方向性の見えない議論に終始する。

南方圏を含む大東亜共栄圏確立の目的は、南方諸地域の民族を欧米の桎梏から解放し、「日本の指導のもとに、アジア人のためのアジア建設といふ民族共栄の新秩序を樹立すること<sup>89</sup>」であったが、そのためには南方諸地域の民族文化を西洋的な歴史観から解放し、日本人の立場から国史を根幹とした歴史的系譜に位置づける必要がある。しかし、西洋的な歴史観を改めることはある程度可能であっても、中国・インド・イスラム文化が混在する地域を「国史」を根幹として再編成することは、ほぼ不可能であった<sup>90</sup>。非常にわかりやすい言葉で、「今や皇国文化を中心として、南方圏の文化相は一新されようとしてみます」とはいえ、ではその皇国文化が何かといえ、中国やインド、西洋の文化を摂取し、たくましく成長した混交文化である<sup>91</sup>。こうした皇国文化の混交性を統一の原理として、かろうじて新たなアジアの文化を建設しようというのが、帝国日本の南方文化政策であり、それ以上でも以下でもなかった。

このような南方文化建設論は、台湾が南進ブームに沸き立っていた1939年、「特にわが台湾は、帝国南門の鎖鑰としてまた南方開発、皇道宣布の拠点として、国防上、文化上担ふ使命は愈々重大を加へつつある<sup>92</sup>」と短い言葉で語られていた頃と少しも変わらず、議論はほとんど進展しなかったのである。島田謹二や西川満も台湾の「地方主義文学」を「南方文学」として育成しようとし、台湾文芸家協会設立の目的にも「南方文化の建設」を掲げてはいたが<sup>93</sup>、だからこそ、国策としての南方文化建設の理念が曖昧だったことは、彼らの目標をも不確かなものにしてしまう。結局、1941年になって、以下のような批判が『台湾日日新報』に掲載された。

ここに文学の問題を取上げてみるならば、台湾文芸家協会が成立してから半年にならうとしてゐるが、今迄のところでは同協会の標榜する南方文学の確立といふその「南方」といふ言葉を台湾が代表してしまつてゐる観があると解釈するのは私の認識不足であらうか、台湾の文学界はさらに南方に向つて手を拡げるべきであり、広く南洋各地の文学を研究或は批判

の対象とすべきであると思ふ。南洋の文学が仮令幼稚であるとしても、その故に看過さるべきではなく、其処に亦吾々の為すべき仕事があるのではなからうか、最も手近な比律賓文学の紹介の如きも未だ行はれてゐないことは何か淋しさを感じるのである—筆者は詩人—<sup>94</sup>

台湾を文化拠点として南方文学を樹立するという方向性は、内地文壇への従属を断ち切り、自立した台湾文壇を確立するためには非常に有効であつたらう。しかし実際には上述の批判通り、台湾文芸家協会が「南方文学」を「広く南洋各地の文学」をも含めて樹立しようとしているのか、あるいは台湾の文学のみを「南方文学」として育成していこうとしているのか、はなはだ曖昧であつた。そもそも「南方」とはどのような範囲を指すのか、「南方文化」とは何なのか、最も基本的な定義すらなされていなかったのである。

しかし別の観点からすれば、台湾では早くから南方文化建設の必要性が喧伝されていた割に、具体的な議論にまで熟さなかつたことが、かえって島田謹二や西川満の考える「南方」の定義に自由な空間を残すことになつたのではないだろうか。島田が西川の詩集『亜片』について論じた文章に、彼らの郷土主義<sup>レジオナリズム</sup>の理念を彷彿とさせる箇所がある。

今日までにわが内地（従つてそれから外地）文壇を風靡して来たものは、現実思想と功利思想の上に立つて人生の倫理的意味を強調した Anglo-saxon 系の文学論、浪漫思想と神秘思想の上に立つて一種超越的な実在へのあくがれを説く Teuton 系のそれ、乃至は一種宗教的な Internationalisme の上に立つて、普遍的な人道思想を叫ぶ Slave 系のそれなどで、要するに北欧から伝播した所謂「人生」的、「思想」的、「現実」的なものが偏愛されてゐたことは否定出来ない。そのためにさうした特性の文学が重んぜられる半面に於いて、Gréco-latin 系のものは、見慣れぬものが受ける待遇のつねとして、不当に軽視せられ、雲煙視せられて来た。いま西川氏はこの南欧的 classique の精神を以て急に詞壇の視聴を惹いた。この種の文学精神が、従来日本の文壇を独占してゐた北欧系統の文学観に立つものに比して、同じやうに価値あることを信ずる自分は、文芸史を究めるひとりとして、台湾のやうな南方の外地にはこれの特に適することを感じてゐたので、『亜片』の出現を人一倍悦びたいと思ふのである<sup>95</sup>。

島田は西川の詩に、従来の日本文学には見られない「具象的、造形的、論理的」な南島特有の精神を見出しているが、それはまさに、明治以来、「北歐的要素」の支配的な内地文壇が軽視していた要素でもあつた。ただしそれは、「台湾」という現実の郷土に根ざした「南島特有」の精神ではなく、ギリシャ・ローマに起源を持つ「南欧」的文学精神のことである。「ねがはくは『媽祖祭』の詩人も、次にその詩境を<sup>ひろ</sup>展く時は、今迄の<sup>ふうぶつ</sup>風物詩的世界に<sup>ひら</sup>跼躄せず、更に根源的な普遍的な情緒を歌ふ<sup>た</sup>民謡の世界を開拓して」ほしいというように、島田は西川が台湾特有の素材を扱いながらも、それを統べるのは「南歐的 classique」の普遍的精神であることを望んでいた。それによつ

て台湾の新たな郷土主義<sup>レジオナリズム</sup>をリードしていくことを、西川に期待していたのであろう。

確かに、台湾に身を置きながら、島田と西川の心は憧れの南欧に向き、台湾という「南方」で、「南欧」的な文学の育成を目指していたように見える。しかし、それは彼らの単なる西欧志向の表明ではなかった。彼らの思い描いた「南方文学」が台湾という現実の郷土ではなく、「南欧」という理想的な郷土に依拠していたとしても、それだからこそかえって、北歐的価値観の支配的な中央文壇に対する抵抗となりえたのである。吉江喬松がいうように、南方の光は生命や文明や創造の源として、北方的要素によっても必要とされるものであり、「共通的で、共有的で、コレクティブ」な南欧の精神は、台湾を中心に南方に伸びていこうとする南進時代に十分ふさわしいものであった。

実際、島田や西川の夢見た「南方」は曖昧で、後には批判の対象にもなる。しかし、内地延長主義から南方進出へと、帝国内における位置づけをシフトしつつあった 1930 年代末の台湾にあって、フレデリック・ミストラル率いるプロヴァンスの文芸復興運動に擬し、南方＝南歐的な郷土主義<sup>レジオナリズム</sup>を育成するという目標は、決して現実離れたものではなかった。むしろ台湾という郷土には根を張っていないようで、実際は在台日本人の置かれた現実から出発していたのである。

## むすびにかえて

以上、プロヴァンス文学の伝播と変容の過程を縦糸に、1930 年代における台湾の郷土熱や南進ブームを横糸に、内地の郷土主義との比較考察をも加え、島田謹二と西川満が地方主義文学の育成を目指した意義について考察してきた。最後に彼らの郷土主義<sup>レジオナリズム</sup>の特質を、1930 年代末という南進の時代、および帝国内部の台湾の位置づけという観点からまとめてみたい。

まず本稿の出発に当り、島田謹二と西川満がドイツの郷土文学ではなく、プロヴァンス文学をモデルに選んだ点に注目した。内地の文芸動向にも決して目配りを怠らなかつた島田謹二が、近代日本文学に与えたドイツ郷土文学の影響を知らないはずはなかつたが、だからこそかえって、反近代主義に代表されるその理念が、1930 年代の台湾ではモデルになりえないことを見抜いていたのであろう。外来の近代化が引き起こした伝統社会の崩壊という問題を抱えていたドイツや日本内地とは異なり、台湾では近代化を持ち込んだのが日本であり、近代化こそ植民地統治を正当化するための口実であった。幾多の『郷土読本』が強調したのも、日本による統治がもたらした社会の発展や安定という近代化に他ならない。1939 年には小林躋造総督が「南進化」とともに「工業化」のスローガンを掲げたこともあり、在台日本人の立場では反近代的な田園回帰や農村回帰を唱えることは現実的ではなく、文芸運動の目標にはなりえなかつたのである。

もちろん満州事変を経て日中戦争勃発後の台湾は総動員体制下にあり、帝国のナショナリズムを共有してはいた。しかし同時に、土着化の進んだ在台日本人の間には台湾に対する「郷土意識」が芽生え、内地の日本主義的郷土主義をそのまま受容することはできなかつたのである。内地延長主義を見直し、台湾を中心とした南方圏の再編成という新たな<sup>レジオナリズム</sup>regionalisme (地域主義) も模索されていた。

アン＝マリー・ティエスはフランスの郷土主義文学を論じて、「郷土主義と国家主義を対立させることはできないが、混同することもできない<sup>96</sup>」と述べているが、この時期、まさに在台日本人社会では郷土主義と国家主義が一方では重なりつつ、もう一方では微妙なずれを生んでいたのである。台湾文芸家協会も活動事項の一つとして「皇民運動の促進」を挙げてはいたが、島田謹二や西川満が台湾の文学を「皇国文化」一色に染め上げようと思っていなかったことも確かである。むしろ彼等には台湾の独自性を打ち出し、日本文学に新生面を開拓しようという野心の方が強く、島田は1941年、『文芸台湾』に発表して物議をかもした論文「台湾の文学的過現未」でも、「将来の作者は台湾在住の諸民族の言語・習慣・宗教・祭典・思想等にも精通してほしい<sup>97</sup>」と述べている。西川も台湾の伝統文化・風俗・歴史に根ざした創作を精力的に続けていた。だからといって彼等は、台湾の農村のような現実的な郷土に地方主義文学の源泉を求めていたわけではない。日本精神の涵養の場としての内地の農村とは異なり、台湾の郷土／農村には台湾人の伝統や民族精神が息づいており、島田や西川には回帰すべき郷土とはなりえなかったのである。

他者の郷土をわれわれの郷土であると宣言するためには、論理のすり替えが必要になる。島田や西川がそれを求めていたとき、ちょうど都合よく南進ブームが起き、南方文化建設のスローガンが喧伝されるようになったのではないだろうか。彼等も時代の波にうまく乗ったのである。内地の日本主義的郷土主義に合流するのでもなく、かといって台湾人の郷土文学を横領するのでもなく、台湾を「南方」という理想的な郷土にしつらえ、新たな文学を育成すること。それは、内地の日本人との間に線を引きはしたものの、台湾という現実の郷土にも回帰できない、1930年代末の在台日本人にとって都合のよい目標となったのではないだろうか。プロヴァンス文学も時宜にかなったモデルとなった。ドイツの郷土文芸運動のような反近代主義ではなく、反中央意識の鮮明なプロヴァンスの文芸復興運動は、ちょうど中央文壇への従属を断ち切り、南方文化圏の建設に向けて発展を夢見ていた、島田や西川の野心をうまく掬い上げることができたのである。南仏の光あふれるイメージが台湾とうまく重なり、吉江喬松が理想とする「南方」文学を樹立することも可能であった。同時に「南欧的精神」を標榜することは、北欧的な文学観に支配された中央文壇に対する抵抗ともなりえたのである。結局、島田謹二と西川満の目指した郷土主義とは、「南方の美」という一見ロマンティックな衣をまといながら、在台日本人社会の変容と南方への発展という現実を見すえた南進化時代の地域主義であり、内地の日本主義的郷土主義とは一線を画した「反中央的な在台邦人ナショナリズム」だったのではないだろうか。

## 注

- 1 近代プロヴァンス文学の紹介は上田敏を嚆矢として明治末期から行われていたが、大半はミストラスやオーバネル等、代表的な詩人とその作品の紹介に止まり、文芸運動について言及したのは吉江喬松が初めてであった。なお、日本における近代プロヴァンス文学の受容については、石塚出穂氏が『仏語仏文学研究』（東京大学仏語仏文学研究会）に第25号（2002年4月）から第29号（2004年5月）まで連載した論文に詳しい。本稿では特に「あやめ咲く野の農民詩人——1920年代の日本と詩人ミストラル」（第27号、2003年5月）を参照した。
- 2 伊藤純郎『郷土教育運動の研究』（思文閣出版、1998年2月）9頁。

- 3 綱澤満昭によると、転向と農本主義との関係は極めて強く、農本主義的感情は転向の大きな動機になったという(『農の思想と近代日本』、風媒社、2004年8月、21頁)と述べている。
- 4 橋川文三や藤田省三は1930年代の農本主義や日本浪漫派を日本の「郷土主義」と見ている。橋川文三『日本浪漫派批判序説』(講談社文芸文庫、2005年8月、第3刷、78頁)、藤田省三「天皇制とファシズム」(『藤田省三著作集1 天皇制国家の支配原理』、みすず書房、1998年3月、146-195頁)。
- 5 台湾の郷土文学論争については、次の文献を参照した。河原功『台湾新文学運動の展開』(研文出版、1997年11月)、中島利郎編『1930年代台湾郷土文学論争 資料彙編』(高雄：春暉出版社、2003年3月)、陳淑容『一九三〇年代郷土文学／台湾話文論争及其余波』(台南：台南市立図書館、2004年12月)、松永正義「郷土文学論争(一九三〇-三二)について」(『台湾文学のおもしろさ』、研文出版、2006年6月)。
- 6 雑誌『帝国文学』で以下の論文が紹介されている。片山正雄「郷土芸術論」(12巻4号、1906年4月)、片山正雄「郷土芸術論(承前)」(12巻5号、1906年5月)、桜井政隆「最近独逸の郷土文学」(14巻3号、1908年3月)、迷羊「海外騒壇——独逸郷土文学の全盛」(15巻1号、1909年1月)。“Heimatkunst”は「郷土芸術」、「郷土文芸」とも訳された。
- 7 ドイツの郷土文学については、立澤剛『岩波講座世界文学——郷土文学』(岩波書店、1933年9月)を参照した。
- 8 百川敬仁によると、日本の場合、近代に入って〈故郷〉の観念と、それに伴うノスタルジアの感情が大きく登場してくるのが、明治二十年代であった。〈故郷〉とはまた、過去の日本のことでもあり、「欧化政策と資本主義化による社会変動のために不安を覚えた都市民の間に、精神的拠り所として日本の過去の社会が理想化」されたという。百川敬仁「国学から国文学へ」(岩波講座『日本文学史第11巻 変革期の文学III』、岩波書店、2000年9月、第2冊、279-280頁)。
- 9 ヘルムート・プレスナーの『ドイツロマン主義とナチズム——遅れてきた国民』(講談社学術文庫、1996年4月、第3刷、47頁)によると、「西ヨーロッパ」とは、早い時期から啓蒙主義の洗礼を受けたイギリス、フランス、オランダ等の国々を指し、ドイツは含まれない。なお、ドイツの反近代主義については、竹中亨『近代ドイツにおける復古と改革——第二帝政期の農民運動と反近代主義』(晃洋書房、1996年12月、165-189頁)を参考にした。
- 10 中根隆行『『朝鮮』表象の文化誌』(新曜社、2004年4月)の第六章「地方農村と植民地の境界」(179-206頁)に詳しい。
- 11 郷土文学反対派の廖毓文、朱點人、頼明弘らはドイツの郷土文学に対し、農村のプチ・ブルジョアジーによる、時代性も階級性もない田園文学であると批判的であったが、推進派もそれをモデルにしていたわけではない。中島利郎編『1930年代台湾郷土文学論争 資料彙編』(前掲書)を参照のこと。
- 12 本稿では近代日本文学史、および思想史の文脈で使われる「郷土主義」と、フランスの *régionalisme* を起源とする「郷土主義」を区別するため、後者には「郷土主義」とルビを振った。吉江喬松が用いた「地方主義」など、引用部分は原典のままとする。島田謹二は『華麗島文学志』の中でフランス語のまま *régionalisme* を用いた他、「郷土主義」や「地方主義」という訳語を充て、西川満は「地方主義文学」としている。*Régionalisme* を「地方主義文学」と訳したのはおそらく吉江喬松であろう。彼が責任編集した『世界文芸大事典』の「レジオナリズム」の項目は吉江自ら執筆し、「*Régionalisme*『地方主義文学』と訳す。仏蘭西に於いて二十世紀初頭以来特に強調せられた主張」と説明している。*Régionalisme* は、「郷土主義」、「地方主義」、「地域主義」などと訳されるべきであろうが、もともとプロヴァンス文芸復興運動の中から生まれたため、日本人読者の便宜を図って「文学」を加えたのであろう。なお、フランス語で“*littérature régionaliste* (地方主義文学)”という言い方は、筆者が見た限り、吉江喬松が参考にした Jean Charles-Brun の *Le Régionalisme* (Paris : Bloud et Cie, Editeurs, 1911)、および Florian-Parmentier の *La littérature & l'époque : histoire de la littérature française de 1885 à nos jours* (Paris: Eugène Figuière et Cie, Editeurs, 1914) に若干使われていた例を除き、戦前の研究書にはほとんど見当たらない。1990年代の文献には頻繁に使われているが、戦前はまだ語として熟していなかったと思われる。また、島田謹二は戦後、『華麗島文学志』を「一種のリテラチュール・レジオナルの研究」と述べているが、“*littérature régionale*”という言い方も、Emile Ripert の *Le félibrige* (Paris : Armand Colin, 1924) の181頁に一度現われただけで、戦前・戦後を通し、研究書にはほとんど見られない。島

- 田自身も、戦前は使わなかった。
- 13 西川満『わが越えし幾山河』（人間の星社、1990年6月）17頁。
  - 14 松風子「西川満氏の詩業」（『台湾時報』、台湾総督府情報部、1939年12月）57頁。
  - 15 島田謹二「小鳥でさへも巢は恋し」（東北帝国大学法文科会編集『文化』2-6、岩波書店、1935年6月）67-78頁。
  - 16 「フェリイブル結社」というのは間違いで、「<sup>フェリブリージュ</sup>Félibrige結社」というのが正しい。Félibres（フェリイブル）は南仏語（プロヴァンス語）で創作する作家・詩人のこと。なお、フェリブリージュは現在も活動を続けており、プロヴァンス語とフランス語によるHPを開設している。  
<http://www.marraire.com/Oc/Felibrige.php>。
  - 17 後に杉富士雄は島田謹二の卓見を評価しながらも、実はこの詩がオーバネルではなく、ミストラルの作であることを証明した。杉富士雄『「海潮音」とフェリブリージュの詩人たち』（『ミストラル『青春の思い出』とその研究』、福武書店、1984年5月）659-671頁。
  - 18 プロヴァンス文学については以下を参照した。工藤進『南仏と南仏語の話』（大学書林、1995年8月、第3版、初版は1980年7月）、西川長夫『フランスの解体 もうひとつの国民国家』（人文書院、1999年10月）、杉富士雄「プロヴァンスとミストラル」（前掲書）、渡辺守章・柏倉康夫・石井洋二郎著『フランス文学』（放送大学教育振興会、2003年3月）、Emile Ripert, *Le félibrige*, Paris : Armand Colin, 1924。
  - 19 フランス語の南部への浸透にともない、18世紀中葉以降、プロヴァンス語の地位が低下し、プロヴァンス語による文学作品が激減したことが背景にある。ただし、フランス語＝国語に対する抵抗の意識が芽生えたのは、革命以後であった。Auguste Brun, *La langue française en Provence de Louis XIV au Félibrige* (Genève : Slatkine Reprints, 1972, Réimpression de l'édition de Marseille, 1927) を参照のこと。
  - 20 『プロヴァンス年鑑』にはプロヴァンス地方の伝説・説話・小話などが収集され、大衆読物として人気を博した。平均発行部数は一万部。杉富士雄『ミストラル『青春の思い出』とその研究』（前掲書）278頁。
  - 21 島田謹二「小鳥でさへも巢は恋し」（前掲書）70頁。なお、この1954年3月21日という日付については、後に杉富士雄が誤りであることを指摘している。杉富士雄『「海潮音」とフェリブリージュの詩人たち』（前掲書）、669-670頁、注（3）を参照のこと。
  - 22 杉富士雄はオーバネルについて、「フェリブリージュ運動が政治的結社の色を濃くするに及んで、彼は芸術至上主義の立場から、文学の純粋性を持って譲らず、ついにフェリブリージュを脱退した」と述べている。杉富士雄『「海潮音」とフェリブリージュの詩人たち』（前掲書）649頁。
  - 23 島田が参照した文献は以下の通り。Ludovic Legré, *Le Poète Théodore Aubanel—Récit d'un témoin de sa vie*, Paris: Librairie Victor Lecoffre, 1894; Eugène Lintilhac, *Les Félibres. A travers leur Monde et leur Poésie*, Paris : Lemerre, 1895. Eugène Lintilhacの著書は入手困難なため筆者未見。Ludovic Legréは、プロヴァンス文学はフランス文学でもあるという立場で、オーバネルの伝記研究および作品紹介を行っている。フェリブリージュの民族主義的、あるいは政治的側面には触れていない。
  - 24 フェリブリージュの新世代は1892年に「連邦主義宣言」(la déclalation fédéraliste)を出した。参照：Emile Ripert, *Le félibrige* (前掲書) 124頁。
  - 25 シャルル・ブランは当初、連邦主義を標榜するパリのフェリブリージュに合流したが、1897年、保守的で南仏イデオロギーの濃厚な組織とは袂を分かち、連邦主義的フェリブリージュの左派主流派として、フランス各地出身の地方主義者とともに地方分権化を要求する広義の régionalisme を目指した。シャルル＝ブランについては、以下の文献を参照。Julian Wright, *The Regionalist Movement in France, 1890-1914. Jean-Charles Brun and French Political Thought*, Oxford, Clarendon, 2003.
  - 26 Charles Le Goffic, *Préface*, in F.Jean-Desthieux, *L'Evolution régionaliste —De Félibrige au Fédéralisme* (前掲書)、IX頁。
  - 27 Jean Charles-Brun, *Le Régionalisme* (前掲書) 142頁 ; F.Jean-Desthieux, *L'Evolution régionaliste —De Félibrige au Fédéralisme*, Paris : Edition Bossard, 1918, 18-19頁。
  - 28 ベル・エポックの地方主義文学については、以下の文献を参照した。Anne-Marie Thiesse, *Ecrire*

- la France—Le mouvement littéraire régionaliste de langue française entre la Belle Epoque et la Libération*, Paris: PUF, 1991 ; Florian-Parmentier, *XI. Le “Régionalisme” dans La littérature & l’époque : histoire de la littérature française de 1885 à nos jours* (前掲書) 125-135 頁。
- 29 相当数に上るので、代表的なものだけ挙げておく。文学研究では Emile Ripert の *Le félibrige* (前掲書) が、フェリブリージュ成立の前史から発展の過程を、ミストラルの作品分析なども含め、詳細に紹介している。歴史方面では、Auguste Brun の *La langue française en Provence de Louis XIV au Félibrige* (前掲書) が代表的。フランス語の南部への浸透を 16 世紀の「ヴィレール・コトレの勅令」にまで遡って歴史的に検証し、革命以降の「国家・国民・国語」の強制に対する反動として、フェリブリージュが結成されたことが論じられている。
- 30 F.Jean-Desthieux, *L’Evolution régionaliste —De Félibrige au Fédéralisme* (前掲書)、15-16 頁。
- 31 Julian Wright の前掲書には Charles-Brun のビブリオ・グラフィが掲載されているが、『地方主義文芸・美学』(*Esthétique Régionaliste*) という単行本は見当たらない。吉江喬松は Charles-Brun の *Le Régionalisme* と同じ 1911 年に出版された、M.-C.Poinsot の *Esthétique Régionaliste* (Paris:Figuière) とを混同したと思われる。
- 32 西川満「歴史のある台湾」(『台湾時報』、1938 年 12 月) 66-67 頁。
- 33 Auguste Brun, *La langue française en Provence de Louis XIV au Félibrige* (前掲書)、およびグザヴィエ・ド・プラノール著、手塚章・三木一彦訳『フランス文化の歴史地理学』(二宮書店、2005 年 12 月) を参照のこと。
- 34 吉江喬松「現代小説概観」(『仏蘭西文学概観』(二)、新潮社、1930 年 3 月)。引用は同書新潮文庫版 (1933 年 4 月) 272-273 頁。
- 35 秋田県秋田市生まれの翻訳家・社会運動家(1894-1978)。本名、近江谷駒(おうみやこまき)。暁星中学卒業後、フランスに渡り、パリ大学法学部を卒業。大正 8 年に帰国し、雑誌『種蒔く人』を創刊し、反戦平和、被抑圧階級の解放を訴えた。なお、小牧近江や吉江喬松のフランス留学については、渡辺一民『フランスの誘惑』(岩波書店、1995 年 10 月) に詳しい。
- 36 吉江喬松の人と生涯については、赤松昭「吉江喬松」(『近代文学研究叢書』第 46 卷、昭和女子大学近代文学研究所、1977 年) を参考にした。
- 37 吉江孤雁「フランス文芸印象記 (三) ミストラルの家」(『新文学』第 16 卷第 1 号、1921 年 10 月) 374-378 頁。吉江喬松「南國」(『新潮』第 36 号第 3 卷、1922 年 3 月) 2-14 頁。
- 38 吉江孤雁「フランス文芸印象記 (三) ミストラルの家」。引用は『吉江喬松全集』第三卷(白水社、1941 年 3 月) 145-146 頁。
- 39 石塚出穂「あやめ咲く野の農民詩人——1920 年代の日本と詩人ミストラル」(前掲書) 136 頁。
- 40 同上。
- 41 小田切秀雄編・犬田卯著『日本農民文学史』(農文協、1958 年 10 月)、山田清三郎『近代日本農民文学史 (上)』(理論社、1976 年 9 月)。赤松昭によると、「フランスにあってデモクラシーやヒューマニズムに沈潜するところがあった喬松は、直接には急進的社会改造運動には参加しなかったが、しかし少数者の横暴を憤るその情熱はやがて農民文芸運動へと注がれて」いったという。赤松昭「吉江喬松」(前掲書) 128 頁。
- 42 小田切秀雄編・犬田卯著『日本農民文学史』(前掲書) 12-29 頁。
- 43 吉江喬松「農民と文芸」(初出は『解放』第 4 卷 1 号、解放社、1922 年 1 月、引用は『吉江喬松全集』第 4 卷、白水社、1941 年 8 月) 122-131 頁。
- 44 水野葉舟・星野辰男共訳、ミストラル著「思ひ出 その一 家出、その二 夢」(『佛国小学読本』上巻、世界文庫刊行会、1921 年)、水野葉舟訳・ミストラル著「太陽をほめる歌」、「驢馬の首」(『フランス小学読本』(世界文庫刊行会、1923 年)、ルグロ著・椎名其二訳『フアブルの一生—科学の詩人—』(叢文閣、1925 年)、犬田卯「野の詩人ミストラル」(犬田卯・加藤武雄共著『農民文芸の研究』、農民文芸叢書第二編、春陽堂、1926 年)、和田伝「仏蘭西に於ける農民文学」(農民文芸会編『農民文芸十六講』、春陽堂、1926 年) など。
- 45 和田伝「仏蘭西に於ける農民文学」(前掲書) 148 頁。
- 46 犬田卯は「地方主義者の態度も、また農民文芸の一部門として許される」と規定しているが、同時に「私個人としては、だから農民文芸の一部門としての地方主義文芸——かの伝統を尊重し、地方色保存を一目的とする地方主義文芸には条件付でなくては荷担し難いのである。それは稍もすれば

- 在来の田園乃至郷土文学の延長、成長として見られないもでもないからだ」と、留保をつけている。農民文芸会編『農民文芸十六講』（前掲書、15頁）を参照のこと。また、石塚出穂によると、この後、日本におけるプロヴァンス文学の研究は停滞し、ようやく生まれた新たな研究が島田謹二の「小鳥でさへも巢は恋し」であったという。石塚出穂「仏文学の周縁へ——昭和前期の近代プロヴァンス文学」（『仏語仏文学研究』第28号、東京大学仏語仏文学研究会、2003年11月）77-96頁。
- 47 小林信行「若き日の島田謹二先生——書誌の側面から（1）」（『比較文學研究』75、恒文社、2000年5月）118頁。
  - 48 吉江喬松「仏蘭西印象記 冬の巴里他六篇」（『吉江喬松全集』第3巻、白水社、1942年3月）。
  - 49 「南欧の空」、『改造』、1922年12月~1923年2月に連載。「南方の美」（『南方文学』第1号、三田書房、1924年5月）。引用は『南欧の空』（早稲田大学出版部、1929年1月、「文芸評論」の73-78頁）。
  - 50 『媽祖』創刊号（媽祖書房、1934年10月）。なお、吉江の言葉はボードレールの詩「旅への誘い」（『悪の華』）を踏まえていると思われる。
  - 51 西川満「台湾文芸界の展望」（『台湾時報』、1939年1月）84頁。
  - 52 鬼谷子「気魄の貧困」（『台湾時報』、1939年5月）164頁。
  - 53 日本統治時代の台湾の郷土教育については、一橋大学言語社会研究科の友人林初梅さんから多くの貴重なアドバイスをいただいた。ここに謝意を表したい。
  - 54 台北F生「新興教育に対する愚感」（『がじゅまる』、1934年8月13日）1頁。
  - 55 こうした状況は1910年代後半から20年代に少年時代を送った西川満の受けた教育と、著しいコントラストをなしている。西川は先に引用したエッセイ「歴史のある台湾」で、次のように述べている。「私たちは少年時代、領台以前の台湾について、一体何を教へられたらう。僅かに濱田彌兵衛と鄭成功と呉鳳位なものではないか。さうして後は、殆どみな内地の歴史であつた。……現実に住む台湾に興味を持ち得なかつたのは、この地の歴史を習はなかつたからである。」また、池田敏雄は次のような談話を残している。「二、三年前より明治文学熱や台湾研究熱が盛んになつて来たにもよるのか、表通りの古本屋などでは余程運のよいときでなければ思ふものも手に入らないので、自然とかうした未耕地にまで入り込んで行くのである。」（池田敏雄「蒐集気まぐれ」、『原生林』第1巻7号、台北：原生林社、1935年12月3日、17頁）
  - 56 北島現映「初等国史教育の本質とその使命に就いて（四）——特に公学校の国史教育に就いて」（『台湾教育』、台湾教育会、1934年9月号）26頁。
  - 57 山中樵「新刊紹介——日本精神への道 郷土読本 我が基隆」（『台湾教育』、台湾教育会、1934年9月号）176頁。
  - 58 北島現映「初等国史教育の本質とその使命に就いて（四）」（前掲書）29頁。
  - 59 「台中教育の歌」（『台湾教育』、台湾教育会、1933年9月号）64頁。
  - 60 「はしがき」（『郷土の概観』、大甲公学校、1933年1月）2頁。
  - 61 山本呑海「郷土教育再吟味」（『台湾教育』、1934年1月号）112-120頁。
  - 62 藤田省三「天皇制とファシズム」（前掲書）146-195頁。
  - 63 『台湾時報』（1933年9月号）141頁。
  - 64 台湾電力社長 松木幹一郎氏談「南方の経緯と台湾に於ける電力問題」（『台湾公論』第1巻第3号、1936年3月1日）。
  - 65 「我台湾の進むべき道」（『台湾公論』、1938年12月）2頁。
  - 66 新垣宏一（『台湾新文学』第1巻第1号、台湾新文学社、1935年12月）48頁。引用は東方文化書局復刻版（1981年3月）による。
  - 67 西川満はそれ以前から、台湾という「郷土」には強い関心を示していた。西川編集の台湾愛書会の機関誌『愛書』は第10輯（1938年4月）で「台湾特集」を組み、「予想外の好評」を博している。また、1939年2月には、『台湾風土記』（過去に於ける台湾の文化を文学的に記録せんとした郷土研究誌）を日孝山房より刊行している。
  - 68 堀越生「協会運動と忘八」（『台湾時報』、1939年9月）120頁。
  - 69 台湾俳句の自治については、橋本恭子「島田謹二『華麗島文学志』におけるエグゼクティヴの役割」（『日本台湾学会報』第8号、2006年5月、95-97頁）で論じた。
  - 70 藤田芳仲「台湾季感の表現」（『ゆうかり』第19巻第3号、台北：ゆうかり社、1939年3月）14頁。
  - 71 松風子「台湾に於けるわが文学」（『台湾時報』、1939年2月）52-58頁。
  - 72 西川満「台湾文芸界の展望」（前掲書）78-85頁。

- 73 島田はさらに「台湾に於けるわが文学」(前掲書、59頁)で、「故に、台湾を舞台とする文芸の士は、アイルランド文学やプロヴァンス文学などの初期と同じやうに、目下のところは頗る少数の具眼者にのみ訴へるに過ぎぬことを、はつきりと覚悟して、衣食の資はその創作した文芸以外のものから求めるだけの用意をなすべきである」とも述べている。
- 74 アン=マリー・ティエスは「パリに支部や協力者を置いていたフェリブリージュの自主独立性を過大評価すべきではない」と述べている。ミストラルの『ミレイユ』が成功を収めたのもパリであった。Anne-Marie Thiesse, *Ecrire la France* (前掲書) 25頁。
- 75 日中戦争勃発以後の内台一体化や国精運動などが在台内地人の文芸に与えた影響については、以下で論じた。橋本恭子「転換期在台内地人之文芸意識的改変(1937.7~1939.12)」(『台日研究生台湾文学学術研討会、発表論文集』、国立中山大学中国文学系、2003年10月)187-200頁。
- 76 小林藤吉は次のように述べている。「湾化!この言葉は誰しも余りに聞きよい印象を与へるものではないし、他の人にも強いて言ひたくないことだが、之は在台者の誰れでも不知の間にじりじりと導き行くので、どうしても免れ得られないのだ。」(『読書随感』、『台湾時報』、1933年5月、53頁)ただし、「湾化」という言葉はかなり早くから用いられていたようで、島田謹二が引用した渡辺香墨の1902年の日記にすでに見られる。松風子「正岡子規と渡辺香墨」(『台湾時報』、1939年5月号、150頁)参照のこと。
- 77 鬼谷子「気魄の貧困」(前掲書)164頁。
- 78 『台湾公論』(台湾公論社、1938年5月)21頁。
- 79 『民俗台湾』第20号(台北:民俗台湾社、1943年2月、28頁)には次のような記載がある。「自分は台湾に来て六、七年になるが、近頃になつて、いろいろな人に接してゐるうちに始めて判つたことがある。それは本島人のみならず、台湾生まれの内地人が、「湾生」の如き一種の蔑称を伴ふ眼で見られ、またそれに対する一の反応から来る「湾生意識」の如きものがそれらの人々の間に存在してゐるらしいと云ふことである。そしてこの所謂「湾生」の反抗意識は相当に強いものであるらしい。」(蓬頭兒)
- 80 後藤乾一「台湾と南洋——『南進』問題との関連で」(『岩波講座 近代日本と植民地2 帝国統治の構造』、岩波書店、1992年12月)147-175頁。
- 81 「編集後記」(『台湾時報』、1939年12月)。
- 82 坂本徳松『南方文化論』(大阪屋号書店、1942年6月)189頁。
- 83 松風子「台湾に於けるわが文学」(『台湾時報』、1939年2月)59頁。
- 84 現在、国立中央図書館台湾分館編纂の『館蔵南洋資料目録』(1994年)には、11,372冊の書籍が記載されているが、出版は1942年から1944年に集中している。
- 85 坂本徳松『南方文化論』(前掲書)192頁。
- 86 幣原坦『南方文化の建設へ』(富山房、1938年)「叙言」1頁。
- 87 幣原坦「南方文化の淵叢たらしめん事を期す」(『台湾公論』第1巻第6号、1936年6月)5頁。
- 88 例えば、尾崎秀真が「繰返されんとする南進時代—南方文化の史的考察」(『台湾時報』、1938年3月)で論じているのは、台湾に焦点を当てた南方海洋文化である。
- 89 佐藤弘編『南方共栄圏の全貌』(旺文社、1942年12月)858頁。
- 90 板澤武雄『南方圏文化史講話』(盛林堂、1942年4月)2頁。
- 91 同上、22頁。
- 92 島田昌勢「台湾国精運動の新展開」(『台湾時報』、1939年9月)3頁。
- 93 1939年12月28日付けの『台湾日日新報』では、「台湾文芸家協会、明春より活躍、南方文化の建設を目指して」という表題の下、協会の活動内容を紹介し、最後に「南方文化の建設のために邁進する由である」と締めくくっている。
- 94 堺謙三「台湾文学の一方向」(『台湾日日新報』、1941年8月22日)。
- 95 松風子「西川満氏の詩業」(前掲書)60-61頁。
- 96 Anne-Marie Thiesse, *Ecrire la France* (前掲書)13頁。
- 97 島田謹二「台湾の文学的過現未」(『文芸台湾』第2巻第2号、台北:台湾文芸家協会、1941年5月)22頁。